

## 新渡戸稲造と近代日本の〈修養〉

王 成\*

### はじめに

新渡戸稲造は、中国では最初に農学博士として紹介された。まず1903年、新渡戸稲造の『農業本論』(裳華房, 札幌農学校学芸会蔵版, 1898年9月)が、上海で出版されていた中国農学会の機関誌『農学報』に翻訳され、連載された。そして1908年には、中国語に翻訳された『農業本論』が江南農業総会から単行本として出版されたのである。

とは言っても、中国で広く知られてきたのはやはり、『武士道』の作者としての「INAZO NITOBÉ」だと思われる。『武士道』(英語名: *BUSHIDO: THE SOUL OF JAPAN*, 1899)はアメリカの出版社The Leeds and Biddle Company, Philadelphiaによって出版され、翌1900年には日本の裳華房からその翻刻版が刊行された。その後1905(明治38)年第10版に際し、増訂版がアメリカのG. P. Putnam's Sons, New Yorkと日本の丁未出版社(1908年, 桜井鷗村訳)から出版され、日露戦争を機に、世界に広く知られるようになった。1905年1月に書かれた増訂第十版の序文で、新渡戸は、同書が多く外国語に翻訳されていることに言及し、「中国訳も計画中である」<sup>1)</sup>と書いていた。その当時の中国語訳は未見だが、それに触発されて、日本亡命中の梁啓超は、『中国之武士道』(1904年11月, 上海広智書局)を書いている。武士道の特徴として「ハラキリ(切腹)」などは野蛮なイメージを持たれていたが、そのような日本イメージをぬぐい去るために書かれたのが『武士道』であった。新渡戸が説いた「武士道」は、「死」を強調するそれとは異なり、日本人の精神を海外に理解してもらうためのものであった。そうであったとしても、『武士道』によって、結局「尚武」「忠君」「仁義」などのイメージが強化されたであろう。第二次世界大戦を経て、中国人の日本理解は、この『武士道』によるところが大きい。近年でも幾多の出版社から中国語に翻訳された『武士道』が出版されており、調べたところでは、中国国家図書館所蔵の中国語版『武士道』は20種類を超えている。このように『武士道』は、日本理解の書物として注目されていたのである。

一方、筆者が中国語翻訳版『修養』(陳瑜との共訳, 中央編訳出版社)を上梓した2009年5月まで、中国では、『武士道』を書いた新渡戸稲造が『修養』の著者でもあることは知られていなかった。今では、中国大陸以外でも、筆者が翻訳した前出『修養』は台湾でも出版されている(『重返修養』福隆工作坊, 2017年)。これら中国語翻訳版『修養』の読書感想文や書

---

\*中国・清華大学人文学院教授。本稿は、平成30(2018)年3月16日(金)午後1時より岩手大学人文社会科学部1号館第1会議室で開催された、岩手大学人文社会科学部創立40周年記念国際シンポジウムにおける同題の記念招待講演(日本語)に基づく。

1) 新渡戸稲造『武士道』, 矢内原忠雄訳, 岩波文庫, 1938年, 14頁。

評<sup>2)</sup>の中には、「もう一度修養のことを」、「凡人の修養」、「幸福を求める修養」、「物質文明の追及より精神の修養」といった言葉がよく見受けられる。高度経済成長を遂げた中国人民の心には、新渡戸の『修養』で唱えられた修養思想が新たに蘇るようになったのである。

ところで、近代日本には、人格を磨いて精神を向上させる精神修養の時代が存在していた。明治維新後、青年たちを鼓舞した言葉は「立身出世」だった。立身出世街道をスムーズに歩むために、精神の〈修養〉や人格の向上が求められたのである。特に実業界での成功が目標とされ、そのためにも〈修養〉が要請された。一方、急激な西洋化がもたらした社会競争の嵐の中、既存の道徳が崩壊し、しかも新しい道徳は成立していないという状況下、青年の煩悶や自殺という問題が大きくクローズ・アップされた。実は、その救済のために〈修養〉が提唱されたという時代背景もあったのである。さらには、度重なる戦争を経て、修身教育の強化と東洋思想を重んずる国粹主義の台頭によって、儒教的な「修身」と仏教的な「修行」とが〈修養〉にすり替えられ、そうした目的のためにも〈修養〉が利用され強調された。

当時の〈修養〉運動の推進者は、啓蒙思想家をはじめとして、教育、宗教、文学、ジャーナリズムなど、各分野の有識者である。彼等は教育実践と布教活動、講演や著書などを通して、人格の修養、自己の向上、身体の鍛練、趣味の涵養、処世の方法など、精神の修養を中心とした徳目を国民に提唱した。そのシンボルこそが、明治・大正の大ベストセラーとして日本人に読まれた新渡戸稲造の『修養』であった。このようにして様々な立場から説かれた〈修養〉の言説は、出版メディアの参入によって、修養書ブームへと発展していく。大量に刊行された修養本が多くの読者を獲得し、宗教運動や社会教育のうねりもそれに加わり、出版メディアのさらなる発達や義務教育の普及もそれらを後押しして、修養が青年層を中心として広まっていったのである。

また、各種の修養団体が精神修養の旗印を掲げ、新興宗教的なものも含めて日本全国に現れ、一種の社会教育運動にまで発展した。そうした動きを通じて、〈修養〉の言説は実践、再生産され、〈修養〉は学問エリートから地方の青年まで、幅広い青年層に広まってゆく。

このような状況にあった近代日本の精神修養のなかで、新渡戸稲造は異彩を放った存在である。日本の東北にある盛岡に誕生した新渡戸稲造は、札幌農学校や東京大学を卒業してから、アメリカやドイツの大学に留学して、近代日本初の農学博士となった。学者としては、『農業本論』を著述して、京都大学や東京大学の教授を務め、植民地政策学講座を開設した。また、技術官僚としても、植民地台湾総督府の農業技師を務めた。さらに、教育者としては、第一高等学校の校長や日本女子大学の学長を歴任した。そしてまた、国際連盟の事務次長を務めて、国際政治の舞台でも活躍した。まさに、夏目漱石や森鷗外などと肩を並べる、近代日本の思想文化の草分けである。そこで、本稿では、近代日本の修養時代を中心に、修養論者としての新渡戸稲造について、すなわち、その修養論がどのように形成されたかについて検討してみたい。

## 近代日本における〈修養〉の時代

前述のように、新渡戸が書いた『修養』は〈修養〉の時代のシンボルであった。武田清子氏

---

2) 例えば、日本語で読めるものとしては、同僚・王中忱氏による書評「新渡戸稲造の『修養』を再読する」(「nippon.comコラム」2012年8月3日版、<https://www.nippon.com/ja/column/g00043/> 最終アクセス：2018年4月1日)がある。

は新渡戸稲造全集本『修養』の解説で、「修身養心の意を持つ「修養」ということが、特に、明治三十八、九年頃から大正時代にかけて、広く関心をよび、「修養」を教育目標として青年教育、民衆教育を提唱する諸々の思想教化運動が普及した」<sup>3)</sup>と指摘し、明治三十八、九年頃から大正時代にかけての時期を「修養の時代」と規定した。

一方、前田愛氏は、「「修養」というシンボルが社会的に流通力を獲得したのはほぼ明治末年から大正初頭にかけての数年間であったと考えていい」<sup>4)</sup>とし、その根拠として、「新戸<sup>(マ)</sup>辺稲造のベストセラー『修養』が初版を出し、野間清治が講談を通じて民衆に修養の糧を提供しようという意図のもとに『講談倶楽部』を創刊したのが明治四十四年である。幸田露伴の修養書『努力論』は明治四十五年に、『修省論』は大正三年に出版された」<sup>5)</sup>ということを挙げている。

また、筒井清忠氏は、「修養主義」の成立時期を明治30年代から40年代までと規定し、「それは「修養」という用語・観念が新しいものとして登場し、国民の比較的広い層に社会意識として受容され始めた時期」<sup>6)</sup>だと捉えている。

以上、三者が共に注目したのは、〈修養〉という概念の登場と受容である。〈修養〉が形成・展開される時期については、武田氏が明治38～39年から大正にかけての時期と規定したのに対して、前田氏や筒井氏はもう少しゆるやかに捉えていた。

近代における修養概念の形成の歴史<sup>7)</sup>を辿ってみれば、〈修養〉が流行し始めた時期は、松村介石の修養論（『修養録』、明治32年11月）や清沢満之の修養論（『精神講話』明治35年11月、『修養時感』明治36年9月）が広く読まれた時期に当たり、それを画期とすることができる。この頃から、青年たちがよく読んだ雑誌には、相次いで「修養欄」が設けられた。例えば、『成功』が「修養欄」（明治35年10月～）を設け、『中学世界』の「修身倫理欄」（明治33年1月～）が「修養欄」（明治36年1月～）に変わり、『無尽燈』も「修養欄」（明治36年9月～）を設けるようになった。この時期から〈修養〉が流行り始め、新渡戸稲造の『修養』（明治44年9月）がベストセラーになり、幸田露伴の『修省論』（大正3年）が広く読まれ、〈修養〉というタイトルがついた文章が頻繁にメディアに登場するようになった。さらに、大正になっても、この〈修養〉ブームは続く。その動向を見れば、明治36年前後から、大正5年の漱石逝去後いわゆる「大正教養派」が登場した時期にかけての時代を、〈修養〉の時代として区分できよう。

### 「修養的教育」を実践した新渡戸稲造

明治39（1906）年、第一高等学校校長となった新渡戸稲造は、大正2（1913）年退任し東大専任教授となるまでの6年間、一高で若き日本のエリートたちを教育していた。〈修養〉の時代に教育界に身を投じて教育家として活動した新渡戸は、講演や文章を通じて〈修養〉思想を模索した。例えば彼は、一高の校長になった翌年、「全国教育者大集会」で「教育家の教育」

3) 武田清子「解説」、『新渡戸稲造全集』第7巻、教文館、1970年1月、694頁。

4) 前田愛『近代読者の成立』、有精堂、1973年11月、219頁。

5) 同前。

6) 筒井清忠『日本型〈教養〉の運命——歴史社会学的考察』、岩波書店、1995年5月、4頁。

7) これについて詳しくは以下の拙稿を参照のこと。王成「近代日本における修養概念の成立」、『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』第29集、2004年12月、117～145頁。

という演説をして、「修養的教育」について次のように呼びかけた。

教育のやり方を二つに別けて一つを実益的学問 (Utility studies) 第二を修養的学問 (Culture studies) とし、実益的学問とは私の訳が悪いが知れませぬが詰り実利を主とするもので、今の実業教育などの如く之を応用すれば直ぐ錢に交換出来る云は、<sup>8)</sup> 現金的教育である (笑) もう一つの修養的と仮に訳しました方は活きた物精神なら精神を養ひ、成る即ち修養するので是は習つた事を直ぐに其儘現金と引替に出来ぬ方で或は十年も二十年も役に立たず。物によつては一生に一度より用に立たぬもあり、丁度種子が土の中に埋められて居るやうに天気的作用に依つて或は或場合に依ると五年か十年経つて漸く発芽するやうな学問を修養的教育と云ふのです。<sup>8)</sup>

その「修養的教育」を「教育家の教育」、つまり師範教育から始めるべきだと訴えた新渡戸は、修養的教育の重要性を力説した。同時代の雑誌『修養界』の時評欄に載った「全国教育家大会」という記事が新渡戸の修養論について次のように紹介している。

独逸学者の説を引き実用的教育と修養的教育との両立して偏重すべからざるを説き我国の現状は実用的教育に偏廢し修養的教育を忽せにする傾きあり日露戦争に現はれし日本魂の如きは恐く明治現今の教育に依て養成されし者に<sup>9)</sup> ならず維新前に於ける精神教育の余力なりと論断し最後に王陽明の修養法たる静座の時間を中学以上の学生に与へ精神修養せしむる必要ありと主張せり<sup>9)</sup>

この記事から、教育者としての新渡戸稲造が修養的教育を実践していたことが窺える。また、一高生の〈修養〉の実態について考察すれば、校長として、授業や文章や演説を通して、学生に大きな影響を与えた新渡戸稲造の存在が大きいと言える。例えば、矢内原忠雄は一高自治寮の正史『向陵』「弁論部部史」の中で、新校長新渡戸の説く〈修養〉論の影響について、次のように書いた。

向陵歴史に取り殊に我部に多大の影響を及ぼせしは新渡戸稲造先生の校長として臨まれし事なり。… (中略) …新校長は訓へて宜く「… (中略) …諸君の現はるゝは自己のみによるに非ず所謂四辺の雰囲気による也、願くは此周囲に城壁を築くなく襟懷落々として性格の修養にこれ努めよ」と。… (中略) …今や新渡戸先生の其二肖像の間に立て霊の修養を説かるゝに至り茲に其の進むべき道の示されて会心の讚仰を禁じ得ざりき。木下校長の下に紅燃ゆるが如き武士的気概を養ひ野野校長の下に沈毅篤学の風起りし我校生徒は今や新渡戸校長の下に精神的積極的に性格を修養せんとす。而して弁論部は最初より心を傾けて新校長を迎へぬ。<sup>10)</sup>

8) 全国教育者大集会編、『帝国六大教育家・附名家叢談』、博文館、1907年10月、151頁。

9) 『修養界』第1巻第1号、1907年6月、44頁。

10) 矢内原忠雄「弁論部部史」、『向陵誌』、第一高等学校寄宿寮、1913年6月、143～144頁。新渡戸も同誌に序文を寄せている。ちなみに、引用文中の「其二肖像」とは「我国文武の典型田村將軍と菅公の像」(坂上田村麻呂と菅原道真の像) のこと。

新渡戸稲造は、ある意味では近代における〈修養〉の型の再建を、身を以て実践した知識人であり、いわゆる一高のエリート教育に〈修養〉を取り入れたのである。そして、彼の教育を受けた一高生だけでなく、彼の講演を聴いて感化された若者も少なくなかった。

### 新渡戸稲造の修養書と〈修養〉の普及

知識青年の間で流行った〈修養〉は、出版メディアによって更なるうねりが創りだされた。すなわち、日露戦争後の出版業の発展に伴い、読者の需要に応じて、修養書の出版も著しく増えてゆく。こうした流行ぶりについて、田中王堂は次のように述べている。

目下我が国の青年の間に最も多く歓迎されて居る種類の書物は修養を題目としたものであるさうである。正確な統計をとつて見たならば、修養に関する書物と、他の題目に関する書物との割合が実際どうなつて居るか、固より自分には解らないが、ちよつと新聞や雑誌の広告を見たり、又青年の述懐を聴いて見たりしたところでも、今日の青年が修養と呼ばれるべきある智識、又は訓練を要求して居ることは事実らしい。<sup>11)</sup>

当時の新聞広告を見ていくと、〈修養〉という言葉を表題に掲げた書籍の多さが確かに目につく。『太陽』明治44年2月号所収の「明治四十三年史」の「第七章 文学」「五 一般出版界」には「所謂成功書類、修養書類も多く世に出て無暗と人に修養を強ひた」<sup>12)</sup>とも書かれている。こうした記事から当時如何に修養書の出版がブームであったかが見て取れよう。

この〈修養〉の時代に作り出されたベストセラーである『修養』は、明治44年9月、実業之日本社より出版された近代日本最大の修養書である。それは、実業之日本社の編集顧問を勤めた新渡戸稲造が雑誌『実業之日本』に連載した〈修養〉に関する随筆を纏めたものである。明治44年9月の初版以降、明治44年9月に既に第6版を出し、大正3年2月に縮刷版として29版を重ね、大正13年3月には第100版、昭和5年には第137版にまで及んだ。

この『実業之日本』も明治30年代から広く読まれた雑誌である。例えば、新渡戸稲造が実業之日本社の編集顧問になる理由を述べた文章「余は何ゆゑ実業之日本社の編集顧問となりたるか」(『実業之日本』1909年新年号掲載)には次のような件りがある。

聞けば『実業之日本』は発行部数が八万の多数に上つて居ると。一部を三人が通読するとしても毎回二十四万人は之を読むことに当たつて居る。一雑誌であるが読者の範囲の広いことは、これでも分る。現に昨年僕が談話した記事に対し手紙を寄越したものが非常に多い。八百屋の丁稚といふもある、医学生だといふもある、料理屋の亭主とか、商館の番頭であるが海外発展をしたいとかいふもある、学校で落第して窮境に陥つたといふもある。<sup>13)</sup>

新渡戸の発言の更なる裏付けとして、当時の読書調査がある。例えば、雑誌『教育実験界』明治40(1907)年5月号に掲載された調査では、富山県西礪波郡内の小学校教員209名のうち

11) 田中王堂「わが修養論」、『丁酉倫理会講演集』、丁酉倫理講演会、1911年9月、1頁。

12) 「明治四十三年史」、『太陽』第17巻第3号(明治44年2月増刊号)、239頁。

13) 新渡戸稲造「余は何ゆゑ実業之日本社の編集顧問となりたるか」、前掲『新渡戸稲造全集』第7巻、682頁。

『実業之日本』を購読していたのは36人であり、購読雑誌の上位4位を占めていた<sup>14)</sup>。その読者層は必ずしも実業学校生や実業界に止まっていなかったことが分かる。

このベストセラーの『修養』を出した実業之日本社では、その出版目録に「修養書類」というジャンルまで登場させ、大正2年3月に「修養書類」として挙げられた本は50冊に上っていた。また、同じくベストセラーとなった加藤咄堂『修養論』（明治42年4月）を出した東亜堂書房の図書総目録にも「修養・処世種類」という項目があり、同社が明治43年時点において出版した修養書は30冊を超えていた。この修養の時代に新渡戸が執筆した修養書には、修養時代のシンボルとしての『修養』のほかに、『随想録』（丁未出版社、明治40年）、『世渡りの道』（実業之日本社、大正元年）、『折に触れ』（丁未出版社、大正3年）、『人生雑感』（警醒社書店、大正四年）、『一日一言』（実業之日本社、大正4年）、『自警』（実業之日本社、大正5年）、『婦人に勧めて』（東京社、大正6年）などがある。いずれにせよ、第一高等学校校長と帝国大学教授というステータスと相俟って培われた、教育界や言論界における新渡戸稲造の人気と『実業之日本』の影響力に支えられて、『修養』は明治・大正・昭和を通じて一大ベストセラーとなったのである。

### 修養書としての『武士道』

ここで修養書としての『武士道』についても触れておこう。それは、第二次世界大戦前まで軍国主義教育に利用されたため、マイナスのイメージもある。しかし、当初、英語で欧米人向けに書かれた『武士道』は、明治32年にアメリカで出版され、日本が日清・日露戦争で勝利した理由づけとしてのガイドブック的な役割を果たしていた。明治38年には10版を重ね、様々な国の言語に翻訳され、文字通り世界的ベストセラーとなる。世界に向けて武士の精神を宣伝した『武士道』は、日本国内では当初英文原書の翻刻本で読まれたので、その読者は一部の知識人に限られていたが、明治41年に桜井鷗村によって日本語に翻訳され、日本における武士道鼓吹と研究のいわば牽引車となった。よって、武士道精神について学問的な考察を行っていても、この本は、他方では軍国主義的に悪用されることも避けられなかったのである。

新渡戸稲造はこの『武士道』において、日本道徳史における武士道の精神を高く評価し、その武士道の道徳体系の「淵源」を仏教や儒教や神道から説明した。特に、仏教ひいては「禅の形式」から、「安心立命の志気、従容として運命の免るべからざるに服する心念、危難災厄に臨みて、ストイック的な沈着不動の情操及び生を軽んじ、死を甘んずるの意気」<sup>15)</sup>といった武士精神の基盤がもたらされたとし、また、武士の精神修養としての儒教の教えや茶道の作法などについても取り上げた。

もっとも、〈修養〉の時代には『武士道』の他にも、禅と武士道の〈修養〉を論じたものが増えるようになった。例えば、秋山（積）悟庵の『禅と修養』（東亜堂書房、明治41年1月）は、武士道を日本民族の道徳の精華とし、明治の文明開化が武士道を見捨てたことを批判しながら、その精神が日露戦争によって証明されたと武士道を賞賛した。修養の時代において、武士道は精神修養の方法として、注目されるようになったのである。

14) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』、日本エディターズスクール出版部、1997年9月、89頁参照。

15) 新渡戸稲造（桜井鷗村訳）『武士道』、丁未出版社、1908年3月、15頁。

### 新渡戸稲造における修養概念

新渡戸稲造の『武士道』が日本人の修養（武士の修養）とは何かについて論じたのに対して、その『修養』の方は日本人の修養をどうすべきかを講釈していた。

新渡戸の修養概念は単純明快である。『修養』第一章に先立つ「総説」で、新渡戸は「修養とは修身養心といふことであらう。身と心との健全なる発達を図るのが其目的である」<sup>16)</sup>と定義した。これは一見伝統を継承したようであるが、そこには近代的な「身体」と「精神」の統一という新しい理念が織り込まれているのである。

また、新渡戸の、「青年の特性」から「立志」、「職業の選択」、「勇気の修養」、「克己の工夫」、「名誉に対する心懸」、「貯蓄」、「読書法」、「世渡りの基準」、「黙思」、「暑中の修養」等までの各修養論は、彼自身の言葉を借りれば「初から可成通俗を旨とし、車挽く人、柴刈る野の人にも、尚解し得る程度に話したいと思直して」<sup>17)</sup>、通俗平易の文章をもって書かれたものであり、それ故に多くの読者の支持を受けたのであろう。

前掲のように定義された修養概念に基づいて新渡戸は、同じく『修養』「総説」で、「所謂自然主義者の主唱するが如く、心の欲するに任せ、心をして動物的ならしめる」、「人は兎角悪を好んで親しみ易く、善を疎んじて遠ざけ易い」、「人心の自然の傾向は、情欲を縦にし、その好きなことを楽しむのが、即ち是れ性に従ひ心を養ふ所以である」と記し、当時流行していた自然主義、ニイチエ主義、ゴルキー主義、そして本能主義を批判、さらにまた、「極端なる自愛説やら我利々々論を主張し、以て修身を説く人」も批判する<sup>18)</sup>。

新渡戸は、修養概念について「修」と「養」を分けて解釈した。すなわち、「修」については、

修むるとは身を修むる意であらうと思ふ。古来かゝる字句があつたか否かを知らぬが、普通にいひ伝ふる言としては、恐らくは大学に本づくのであらう。……（中略）……治国、齐家、修身と列挙せることより見るも、自己がその意志の力によつて、自己の一身を支配することであると思ふ。則ち修身とは克己なることが本となつて、肉体情欲の為に心を乱さぬ様、心が主となつて身体の動作又は志の向く所を定め、整然として、順序正しく、方角を誤らぬ様、挙動の紊れぬ様、進み行く意であらうと思ふ。<sup>19)</sup>

一方、「養」については、「養とは心を養ふの意であらう。而して養といふ字は形に表はれて居る通り、羊の食といふ意義である」<sup>20)</sup>とされ、仔羊は迷いやすいから、指導する必要があるため「善にも悪にも誘惑され易いことは、恰度人間の心と同じ様である。」<sup>21)</sup>そこから、キリストとその弟子ペテロの対話（「『師よ、予、汝の為に何をか為さん』」、「『汝、我を愛するなら、我仔羊を養へ』」）を引用して、「養」がさらに説明される。すなわち、

16) 新渡戸稲造『修養』（縮刷版第四十一版）、実業之日本社、1914年11月、本文4頁。

17) 同前、序文3頁。

18) 同前、本文4～6頁。

19) 同前、本文1～2頁。

20) 同前、本文2～3頁。

21) 同前、本文3頁。

修養の養といふ字は、各自の預かつて居る、柔和な、少しく荒く扱へば、息の根も絶へ易い、その代り、懇切に養へば最も能く馴く、仔羊の如き心に食物を与へ、寒い時には温を与へ、暑い時にはこれを涼ふし、横道に踏み迷はんとする時は、之を呼び止めて、正道に反らし、有らゆる方法を用ゐて正道に従ひ養育する意であらう。<sup>22)</sup>

以上の言説からもわかるように、新渡戸は、古今東西の修養理念を融合して、独自の〈修養〉概念を得たと言える。特に新時代の新修養を意識して、「修身」という伝統的な定義に「養心」を加え、「人格全般」にわたらせるために、「身体」と「心」の「健全」が必要と説いたのである。東西思想の聖書である『大学』と『聖書』から文言を引用して〈修養〉を解釈した新渡戸稲造の立脚地が近代にあることは明らかである。彼の提出した修養概念は、伝統的思想を近代的に翻訳したものであった。

### おわりに

近代における修養概念は、翻訳された漢語概念である。近代における〈修養〉という言葉については、文明開化の時代に入り、西洋のcultureという概念を翻訳する際に、儒学の「修身」と区別するために〈修養〉という言葉が古典から再発見され、近代的な意味合いを付与されたのがその始まりだと思われる。

明治から大正にかけては、〈教養〉という言葉より〈修養〉という言葉の方がよく使われていた。中村正直の『西国立志編』から始まって、自分自身を修練する「自修」的な教育という理念が浸透していったのである。〈修養〉は、それが翻訳語として現れる以前には、漢語の熟語としてはあまり使われていなかった。例えば、明治40年代、修養論が盛んになった時期、修養論の提唱者である村上専精はその著書『通俗 修養論』の中で修養概念に言及しているが、それは同時代の証言として、近代における〈修養〉の起源を探るのに、一つの手がかりとなると思われる。その〈修養〉に関する文章は次のような解釈を下した。

修身、修道修行、是れ等の用語は、古来既に应用すと雖も、修養は吾輩の青年時代にありては、未だ聞かざる用語である。然るに近來訳語に之を応用せし結果なるか、或はまた修養の必要を認めし結果なるか。孰れにしても近頃盛んに此の語の流行を見ることになつて来たのは、まづ悦ぶべき現象といはねばなるまい。<sup>23)</sup>

村上専精は、自叙伝『六十一年（一名赤裸裸）』の書き出しに「嘉永四年辛亥の四月一日は、吾輩が初めて此の世に生れ出で世界の中の一人となつた日である」<sup>24)</sup>とあるように、江戸幕末の1851年生まれなので、その青年時代が明治初期に当たる。「修養」が彼の青年時代に「未だ聞かざる用語であつた」とすれば、それは一般的にまだ使われていなかったと考えられる。それ故、〈修養〉は、古典的な儒教道徳の意味を担った言葉ではなく、近代的な用語として誕生したのである。明治国家が儒教の「修身」を教育理念として国民に押しつけ始めた明治20年

22) 同前、本文3-4頁。

23) 村上専精『通俗 修養論』、丙午出版社、1911年4月、本文1～2頁。

24) 村上専精『六十一年（一名赤裸裸）』、丙午出版社、1914年1月、本文1頁。

代以前は、「修養」は近代的な個人になるための、自己教育や訓練の意味で使われていたが、明治20年代以降は、「修身」を是正ないしはそれに反発して精神や人格の向上をはかる概念として、定着してゆく。つまり〈修養〉は、近代性を強調しつつ、精神のおよび道徳的という両様の意味で使われるようになった。その場合の〈修養〉概念は、忠君愛国を重視した「修身」とは逆に、個人的な精神向上の意味で使われたと思われる。

伝統と現代、東洋と西洋とが衝突する時代、そこでは伝統的な道徳が崩壊し、新しい道徳の再建のために、個人を中心とした〈修養〉が広まっていった。明治、大正にわたって、東西の学問を身に付けた知識人が、〈修養〉を近代的な新しい倫理の理念として取り入れたのである。

〈修養〉の流行に伴って、修養運動が広まり、ベストセラーになった修養書が修養理念を流行させ、定着させた。そうした〈修養〉の時代にあって、新渡戸稲造の〈修養〉概念には、西洋近代のcultureやBildungという意味も、伝統的な「修身養心」の意味も含まれていた。それをふまえたうえで社会に役立つ近代国家の一員として、人格を磨き、精神と身体をともに修練することの重要性が説かれたのである。